

九州の古書店：古本屋巡りをする人のために（一）

坂口，至
熊本大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/10372>

出版情報：文献探究. 31/32, pp.8-20, 1993-12-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



九州の古書店

— 古本屋巡りをする人のために (一) —

坂口 至

これまで私は同人の一人として、「文獻探究」に自由に書かせてもらって来たが、さらに図に乗って、「文獻探究」の一つの方策としての古本屋巡りについて書いてみたいと思う。論文でもなく、資料の紹介でもないコラム記事として、興味のある方だけに読んでもらえば幸いである。

国語国文学の研究者で、古本屋を利用したことのない人は恐らくいないと思うが、古本屋を最大限に活用する方法については、あまり深く考えられていないのではないかとと思う。多くの研究者は、例えば「全国古本屋地図」(日本古書通信社)などを頼りに、自分の住む都市の周辺の古本屋を折りこみで回ったり、学会ついでに他都市の古本屋に寄ったりして、古本屋を購入する程度で、どうしても欲しい本は、少々値が張っても、中央の大都市の古書店に目録注文をして購入するという方法をとっているのではないだろうか。そういうやり方に文句を言う筋合いはないのであるが、書価の高騰が続く今日、古本屋の利用価値はますます高くなって来ており(それに反比例して、良い古本屋の数はますます少なくなつて来ている)、良い本をできるだけ安く購入するために、さまざまな工夫ができるならば、それに越したことはないであろう。しかし、古本屋の利用法について、細かに書かれたものは案外と少ないと思われるのである。古書について書かれた本はたくさん出ているが、それらの大部分は、古書を買う側にとつたものか、珍本・稀覯書にまつわる思い出話・自慢話の類である。私もその手の本をかなり集めたが、自分自身の古書探索にはほとんど役立たなかった。そこで、いろいろと試行錯誤しながら、良い古本屋を探し、安く本を手に入れる工夫を考え続けて、現在に至っているのである。古本屋巡りのノウ・ハウと言えば大袈裟かもしれないが、何らかの形で読者の参考にはなると思う。

ただ、古本屋巡りについて説くに、私が最適任であるかどうかと問われれば正直わからないと答えるしかない。私の古本屋巡りは学生時代に始まるが、その経歴はたかだか二十年足らずであり、しかも現在のように頻繁に古本屋巡りをするようになったのは、熊本に住むようになった五年ほど前からである。私より古本屋巡りの経験の豊かな人はたくさんいらっしゃるだろうし、古書について私よりはるかに深い知識をもつ人も多いことだろう。それにもかかわらず、敢えて筆をとろうとするのは、古書に関心のある研究者にとつて、今最も知りたいことが、最新の、古書と古本屋についての情報であり、古書をできるだけ安く買う方法であると考えるからである。この点に限れば、私が人に劣ることはないと思つてゐる。

今回は、まず最新の古書店の情報を提供したいと思う。順序からすれば、古本屋巡りのノウ・ハウを説いたあとになるべきところだが、明日にでも古本屋に出掛けてみようという氣に、まずなつてもらうためには、先に良い古書店の紹介と、こんなに安く買えましたよ、という実例をあげたほうが良いと思つたためである。紹介する古書店は、私が頻繁に訪ねている九州(沖縄を除く)の古書店に限ることにする。いつの日か、全国の古本屋を紹介できればと思つてゐるが、恐らく無理だろう。

なお、以下の紹介は言うまでもなく私個人の興味から眺めた古書店の特徴である。研究対象や趣味の違う人から見れば、また違ったものになるであろうことをあらかじめお断りしておく。と言っても、私の古書の興味の対象は、かなり雑である(だからこそ、頻繁に、憑かれたように古本屋巡りをしてゐるわけである)。それを箇条書き的に挙げると、次のようになる。

専門関係・国語学・言語学全般の研究書・啓蒙書、国語史研究に供せられる古典文学(特に中世・近世の演劇、芸能関係)の文獻、古典文学関係の文庫(特に岩波)・新書本、等。

趣味関係・近代文学の評論・隨筆、児童文学の評論・創作、書物(特に古書)に関する書物、指揮者を中心としたクラシック音楽関係の本、童謡・唱歌・歌謡曲関係の本、犯罪(特に冤罪)に関する本、整数論を中心とした数学の啓蒙書、宇宙と地球科学に関する本、SF映画に関する本、陸上競技・野球・ボクシングを中心としたスポーツに関する本、等。

以下、九州北部の古本屋から順に紹介するが、これらは大部分が「全国古本屋地図」(最新版は、平六年改訂新版として、平五年十月下旬に発行)等に掲載されているものである。それらの記述と併せて参考にしてもらいたい。また逆に、それらに掲載されていて、ここで紹介できない店も少なくないが、それらは筆者の尺度から見て多くを期待できない店という意味である。一度は寄つてみて、各自で確かめていただきたい。

なお、購入した古書の例示の箇所であるが、それらはいずれも最近五年ほどのうちに買った本である。また、重版本という言葉は、ここでは初版印刷以外の本のことを便宜的に言つたもので、初版の重刷本も含めてゐる(近代文学以外は、初版・重版というのはあまり意味がないのだが)。また、比較の対象として古書価の次に出している古書店は、いずれも東京神田の店である。

〔福岡県〕

福岡県の古本屋は、福岡市と北九州市の二大都市に集中しているが、他の中小都市にもポツポツと存在しており、掘り出し物に巡り会うことも稀れではない。この二十年くらいの動向としては、北九州市にはそれほど大きな変化はなく、福岡市の古本屋地図が大きく変わったことが挙げられる。また、かつては五、六軒あつた久留米市の古本屋の多くが店を閉めてしまったのは惜しいことである。しかし他方、県南端の大牟田市には特徴のある古本屋が出現しており、衰退一方の傾向に歯止めがかかつてゐるのは、嬉しいことである。

まず、北九州市の古本屋から紹介する。

【佐藤書店本店】(北九州市門司区)

JR九州の最北端の駅、門司港駅近くにある店。列車を利用する場合、本州からは、門司または小倉まで来て、鈍行でUターンする必要があるが、九州内からも急行以上の列車が使えないという、やや不便な立地条件であるが、北九州に限らず、九州全体の古書店を代表すると言っても過言でない、レベルの高い店であるので、繰り返し訪ねてみることをお勧めする。

店内は、広いスペースで、通路をたつぷりとっており、明るく、天井も高いので、古本屋特有の圧迫感がない。古書は、見事に整理されており、国語国文のほか、哲学・思想、社会、歴史、宗教、郷土図書と、文科系の専門書が非常に充実している。

これだけでも、九州の古書界が誇りにしてよい立派さであるが、特記すべきは、古書価格が、これだけの規模の店としては、かなり安いということである。特に、絶版もしくは品切れ中の古書に、原価のまま、あるいはそれ以下の値段をつけて売られていることがまゝあり、筆者も何度かその恩恵にあずかった。ここ数年の例で、特に有り難かったのは次の三冊である。『日本文学史の語彙』(日本方言研究会・柴田武編、三省堂、昭五三初版本、購入価四千八百円、定価六千八百円、古書価二万円(八本書店、平一)、平一購入)、『洋学資料と近代日本語の研究』(松村明、東京堂、昭四五初版本、購入価五千五百円、定価五千五百円、古書価四万八千円(日本書房、平二)、平一購入)。

【佐藤書店支店】(北九州市門司区)

JR門司駅近くにある。本店が重厚な研究書を揃えているのに対し、やや軟らかい本が多いのが特徴である。中でも、言葉に関する一般向けの本と、近代文学の創作・評論関係の本にスペースを割いており、値段もかなり安い。本の回転も早いので、できれば数カ月に一回の割合で訪ねてもらいたい店である。

【近代文学の軌跡】(正・続二冊、近代文学同人編、豊島書房、昭四三初版本、購入価合一千七百元、古書価合六千五百円(文泉堂書店、平二)、平二購入)など。

【教養堂書店】(北九州市小倉北区)

かつて小倉最大の繁華街、魚町銀天街の中にあつたころは、専門書から一般書まで、あらゆる分野の本がうす高く積まれていて、九州最大の古書店と言つても過言ではなかつた。店舗をやや南に動かしたあとも、規模の大きさは有数であるが、古書の整理が行き届いて、やや専門書志向が強くなり、掘り出しものは期待しにくくなったようにも思う。

古書は文科系全般に亘るが、特に郷土史、美術書が豊富である。全集物に関しては九州一かもしれない。わが国語国文学関係の本も多いが、やはり近代文学、特に詩歌が充実しているようだ。

ところで、客と古書店の相性ということもあるようで、筆者のこの店に対するイメージは、これまであまり良くなかつた。それは、学生時代に寄るたびに本の値段の高さに溜め息をついて、まともに買い物をしなかつたことがそもそもの原因のようである。その後も、高いという先入観に支配されて、近くに來

た時でも、そのまま素通りすることも多く、たまたま寄る気になって店の前まで来ると、シャッターが下りていたり、とうとうこれといった収穫がないままに、今日に至っている。しかし最近、値段の方も、他の店に比較してそれほど高いという感じは受けない。例えば、既買の本であるが、『九州方言音調の研究』(平山輝男、学芸之指針社、昭二六)に四千八百円を付けているが、これは神田の値段の半分くらいである。その他、新書・文庫本は品切れの場合でも、かなり安いようだ。

【アタゴ書店】(北九州市小倉北区)

魚町銀天街のアーケードの中にある。こぢんまりとした店であるが、面白い本が多いようだ。この規模の店としては珍しく、自然科学の専門書がかなり並んでいる。国語国文関係の本は、特に目立ったものはなさそうだが、絶版・品切れの文庫本に良いものがあり、値段も安い。

【浪漫書房】(北九州市小倉南区)

北九州大学のそばにある。場所がらで、人文・社会科学関係の研究書・教科書が多いようだ。国語国文の本も少なくないが、今のところこれといった特徴は見られず、今後の充実に期待したいところである。

この他に、小倉周辺には『太陽堂書店』(小倉北区)と『若松書房』(同)がある。前者は黒っぽい本がなかなか多い。ややわかりにくい所にあるので、探訪者も多くないと思われる。思わぬ掘り出し物があるかもしれない。後者は、一般書中心。目録販売に力を注ぎ、硬い本はそちらで売っているようである。

【夢屋】(北九州市戸畑区)

次に、戸畑区の古書店であるが、JR戸畑駅に近い方から、『山田書店浅生店』、『山田書店本店』、『夢屋』、『園田書店』と四軒ある。いずれも一般書中心で、国語国文学の堅い本を期待するのは難しいようである。中で、山田書店浅生店は、芸術関係の本がかなりあり、未整理だが国語国文関係の本も少なからず置いている。ただし、値段は安い方ではない。そして、この地区の代表として挙げた夢屋は、店頭の本こそ多くないが、若い主人が精力的に蒐書中のようで、古書目録「べくわ考」を見る限り、書庫に収まっている本がかなり豊富のようだ。主人は気さくな人柄で、古書即売会の情報などを親切に教えてくれる。他の店も、通信販売もしくは古書即売会に力を置いているのかもしれない。

【今井書店】(北九州市八幡東区)

八幡東区の古書店はこだけである。他の店とはかなり離れているが、北九州市の古本屋巡りには欠かせない店である。西鉄の三条バス停近くにある。市街電車が走っていたころは、小倉方面から単一の路線で簡単に來られたが、現在はバス路線の系統に注意しなければならぬ。

古書内容は多岐に亘るが、特徴は郷土史、一般歴史、美術書などにあるようだ。国語国文関係の方は、近代文学中心だが、重厚な研究書は少ない。雑誌のバックナンバーもかなり置いている。他に見逃せないのは、絶版・品切れの文庫本で、岩波文庫を中心に珍しいものが多い。値段も、大部分が六千八百円程度で、かつては高く感じたものだが、千円以上する新刊文庫本も少なくなくな

った現在では、手頃な値段と思うようになった。

【人文堂書店】（北九州市八幡西区）

八幡西区の古書店は、JR黒崎駅周辺にかたまっているもので、探訪には大変便利である。人文堂書店は、黒崎駅の近く、藤田銀天街のアーケードの東入口をはいってすぐ右にある。北九州市でも代表的な古書店の一つである。店内は明るく、きれいに整理されていて気持ちがいい。古書は文系図書全般に亘るが、特に社会科学関係の本に特徴がある。わが国語文関係の本も少なくない。特に、戦後の小説や評論の黒っぽい本が相当に多い。値段は標準的と思われる。他に、岩波を中心とした絶版・品切れの文庫本が非常に多く揃っている。こちらは値段もかなり安いようだ。筆者は学生時代以来、ここでたびたび良い買い物をしているが、近年では『講座日本語』（全七冊揃、大月書店、昭三〇）や『初版本、購入価合一千五百円、古書価合五千元』（日本書房、平二）、平二購入がある。

なお、この店は北九州の古書店巡りには欠かせない店であるが、最近近は定休日以外でも閉まっていることが比較的多い。主人の高齢がその理由であろうと思う。あらかじめ電話で確認してから出向いた方がよいだろう。

【藤井書店】（北九州市八幡西区）

人文堂書店と同じアーケードを西へ百メートルほど行くと、アーケードが切れたところを右に曲がったところにある。歴史のある店である。『全国古本屋地図』が紹介しているように、本の手入れが不十分で、平台に無造作に並べるといふ時期が長かったが、最近は書架も整い、平台の数も減って、かなり近代的になってきた。ただし、本の内容の充実はいささかというところである。特徴は、歴史と美術関係図書にあるようだ。

【古書榎樓】（北九州市八幡西区）

藤井書店からアーケードの方へ戻り、道路をはさんで再び続くアーケードをさらに西へ百メートルほど行くと右に折れたところにある。JR黒崎駅からはこちらの方が近い。人文堂の支店というところであるが、軟らかい本が多いので客の数も多そうだ。通路を挟んで、一方が文庫・コミック・児童書中心、もう一方がやや硬い本・一般書ときれいに分けてある。国語国文学関係の本は、やはり近代文学中心である。他に、品切れ本も含めて新書本がかなり多く、値段も安い。

【古書珍竹林】（北九州市八幡西区）

JR黒崎駅のすぐ右前にある。開店後一年のごく新しい店である。『全国古本屋地図』には古本センターとして記載してある。広い店内には、専門書から文庫本・コミックまで多量の本がある。和本も置いてある。専門書・啓蒙書は戦前・戦後の黒っぽい本が大部分で、今日の学問レベルに耐え得る本は少なそうであるが、未整理のまま並べてある中で、じっくり探書すれば編みぬ掘り出し物に当たるかもしれない。『諸説一覽 奥の細道』（麻生磯次編、明治書院、昭四五初版本、購入価五百円、古書価一万六千元）（日本書房、平五）、『小林秀雄論』（本多秋五、近代文学社、昭二四初版本、購入価二千元、古書価二

万三千元）（文泉堂書店、平五）、『森鷗外研究』（中野重治編、新潮社、昭三二初版本、購入価五百円、古書価一万二千元）（文泉堂書店、平五）あたりが、筆者にとつての掘り出し物である（いずれも平五購入）。また、古典文庫の記念すべき第一冊、『西本願寺本 萬葉集 一』（昭二二）を二百円で手に入れたのもここである（平五購入）。

【書肆アモルフ】（北九州市若松区）

若松区には、若戸大橋のたもと近くに二軒の古書店がある。ここは、車で来れば簡単であるが、JRやバスでは不便である。しかし、やはり見逃すことのできない良い店がある。

書肆アモルフは、店主によれば、五年ほど前に既に店を出していたというが、『全国古本屋地図』にその名が載ったのは昨年（平四）のことである。筆者も今年四月に初めて訪ねて驚いた。現在、北九州市の古本屋の中で、最も注目される店の一つと言つてよいと思う。店舗そのものは小さいが、古書は人文科学を中心に全般に亘る。特徴は、何と言つても近代文学で、研究書・評論随筆・創作の各分野にわたって良書を揃えている。詩歌関係の本も充実している。きれいな本が多く、値段もかなり安い。語学関係の本も、他の店に比べれば多いほうである。とにかく寄る度に充実度を増しており、目の離せない店である。書肆アモルフのすぐ近くにあるのが、『古書パピルス』。『全国古本屋地図』未掲載の店である。文庫・コミック本・一般書中心だが、ときどき専門書が廉価で買えるので、寄つてみる価値はある。『昭和日本語の方言6 九州東部・定価七千円、平五購入』（藤原与一、三弥井書店、昭六一初版本、購入価三千五百円、平五購入）がその例である。以上、北九州市の古書店を紹介したが、これらは東西に細長い市の全域に散らばっており、ただ一つの交通機関でカバーすることが出来ない。一日で見えて回るのは到底無理である。車は移動には便利だが、駐車場探しが面倒である。筆者自身は、佐藤書店本店のある門司港駅の駐車場、または戸畑駅の駐車場に車を置いて、あとはJRとバスで移動することになっているが、一日で半分の程度の店を回るのが精一杯である。

次に、北九州市周辺の他の都市にある古書店を紹介しよう。

【宮部書店】（飯塚市）

飯塚は、かつて炭鉱町として賑わった所である。現在はその面影は薄れてしまったが、ここにたった一軒ある古書店は、どうしてこんな所にこんな古本屋が、と恐らく誰もが唖然とするような、内容の濃い店である。こぢんまりとした店構えの半分は、一般書・新書・文庫本であるが、残りの半分が法律・経済関係と国語国文学の重厚な研究書など目立つのである。特に、古典文学が充実しており、笠間書院の叢書の類などが目立つ。値段が付けられない、いい本が多く、レジで聞く必要がある。国語学関係は比較的多くないので、筆者自身はまともに買い物をしていないが、全体的にかなり良心的な値段のようである。『日本古書通信』などで宣伝をしている様子がないので、あまり知られていないのかもしれない。ともかく騙されたかと思つて、是非一度寄つてみるべし。市の中心部、本町商店街のアーケードの中にある。

【すかぶら堂書店】（宗像市）

近年市に昇格した宗像は、どこが市の中心なのかさっぱり判らないところであるが、この店を探すのは簡単で、JR鹿兒島本線の福岡教育大学前駅で降りればすぐ近くである。店は大きくなく、古書も場所がらで大学教科書・一般書などが多く、店頭販売の本に限れば、それほど特徴のある店ではない。しかし、この店の販売戦略は、明らかに目録通信販売の方にある。古書文献目録「兎」は全国にその名を知られており、既に四〇号を数える。筆者も学生時代に何度か注文したことがあるが、近年の充実ぶりは瞠目すべきものであり、四〇号など二百ページを超える大冊になっている。内容はあらゆる分野に亘り、時代も近世から現代まで幅広い。中でも庄巻なのが教育関係文献で、目録の半分を占めている。わが国語国文関係の本はそれほど多くないが、値段は比較的安いようで、特に近代文学が良心的である。

【求菩提書房】（行橋市）

北九州市から大分方面へ向かうJR日豊線沿いにも何軒か古書店があるが、筆者の見たところでは、行橋市のこの求菩提書房は寄ってみる価値があると思う。比較的広い店内は、コミック・文庫本・一般書が多いが、近代文学を中心とした国語国文関係の白っぽい本もかなり置いてあるようだ。

次に、福岡市の古書店を紹介しよう。この古書店地図は、昭和五十年代前半に、大規模な都市整備に伴って大きく変貌したが、その後も変化は続いている。学生時代をこの地に送った筆者には、特別の思い出があるが、その思い出を語ることは、ここでは省略しておきたい。

現在、福岡市の古書店は、大雑把に言って、東部の香椎地区・箱崎地区、中央部の天神地区・六本松地区、南部の西鉄大牟田線沿線地区にまとまって存在している。そのいずれの地区にも、有力な古書店があるので、古本屋巡りの対象から一地区も外すことが出来ない。したがって、主要な店を回るだけでも、最低二日は必要である。以下、東部の店から見て行く。

【あしび文庫】（福岡市東区）

香椎地区の古書店は、JRと西鉄双方の香椎駅からすぐの距離にまとまって存在する。JRでもよいが、市中心部からは、地下鉄を西鉄宮地岳線に乗り換えるのが、早くて便利である。

あしび文庫は、JR香椎駅前の通りを左折したところにある新しい店である。近代的な店構えで、中も広く明るい。文科系図書全般を扱っているが、社会・思想関係の本、特に中国大陸に関する本に特徴があるようだ。国語国文関係の本も少なくないが、中心はやはり近代文学である。その他、いろいろな雑誌のバックナンバーが目立つ。値段も、比較的安いように思う。

【あい書林】（福岡市東区）

あしび文庫の先へすぐの距離にある。こちらは伝統的な古書店然としていて、その抑えた照明、低い天井は、筆者などには却って好ましく感じられる。それほど歴史のある店ではないが、古書は文科系全般に亘り、黒っぽいものが多く、珍しい本も多い。古書にはすべてきれいな透明のビニールカバーがかけられて

いて、店主の古書愛する気持ちが伝わってくる。

わが国語国文関係では、古典文学もかなり豊富であるが、ここ数年で、特に近代文学が急速に充実して来たように思う。重厚な研究書から、創作・随筆に至るまでよく集めている。近代作家の創作に限れば、九州随一と言ってよいのではないかとと思う。また、絶版・品切れの文庫本にも良いものが多い。ただし、値段はよく調べてあり、特別安いという印象はない。むしろ、国語学の方に掘り出し物が出るようだ。「日本語のアクセント」（日本文学学会編、中央公論社、昭一七初版本、購入価三千円、古書価二万円（八木書店、平三）、平三購入）は、その代表格である。

【一心書房】（福岡市東区）

JR香椎駅前の通りを、あしび文庫などと反対の方向へ曲がり、二百メートルほど行ったところにある。歴史、社会科学関係の本が多い。「群像」などの雑誌のバックナンバーもかなりのスペースを占めている。国語国文関係の本はそれほど目立たないが、値段は比較的安いようなので、寄ってみる価値はある。

【日比谷書店】（福岡市東区）

九州大学の医・歯学部以外の学部が集中する東区箱崎地区には、現在四軒の見るべき古書店がある。かつては、かねた書院、第一書房といった特色のある古書店があったが、いずれも休・廃業し、その代わり新しい店が二軒できた。

日比谷書店は、九州大学正門前にある。古書全般を扱っているが、工学部・理学部が一番近い創作・随筆は少なくない。筆者は学生時代から何度となくこの店に立ち寄っているが、特別の印象がないのは、黒っぽい本が少なくて、高くもなく安くもないという値段に原因があるようだ。なかで、「日本外来語の研究」（煤垣実、研究社、昭三八初版本、購入価一千九百円、古書価五千五百円（西秋書店、平二購入）は、やや良い買い物だった。

【地行書店】（福岡市東区）

日比谷書店のすぐ近くにある。歴史のある店であるが、国語国文関係の本は少なく、値段も安い方ではないので、筆者はこの良い客になれないまま現在に至っている。地方史、社会・思想関係の本は充実しているようだし、理系の専門書も少なくない。地方史、社会・思想関係の本は充実しているようだし、理系の専門書も少なくない。

【玄学書房】（福岡市東区）

数年前に出来た新しい店。西鉄の九大前バス停のそばにある。地行書店からも歩いて一分の距離である。面白い店でも、普通の古書の外に、メンコ（筆者の方言ではベタ）などの懐かしい子供のおもちゃも置いている。音楽・映画関係の書籍が充実し、古いレコードも多い。古書は、白っぽいものが多いが、重厚な研究書も短期間のうちに相当に充実してきた。国語国文関係ではやはり近代文学が多い。また、九州の古書店では珍しく児童文学関係の本が多いのも特徴。各社の新書本も非常によく揃っている。とにかく多様な購買層を楽しませてくれる店である。

【原田書店】（福岡市東区）

玄学書房から南下、JR鹿兒島本線の踏み切りを渡り、四百メートルほど行

った右側にある。真新しい店で、一般書・文庫・コミック中心であるが、文系の白っぽい専門書も次第に増えて来たようである。値段は全体にかなり安い。

【趣味の店】(福岡市博多区)

箱崎地区から天神地区への途中には一軒、当店がある。地下鉄を中洲川端で降りて、上川端町商店街のアーケードを三百メートルほど南下したところにある。歴史は浅いが、黒っぽい本がなかなか多い。戦前の珍しい本や雑誌が、平積みしてあるのも一見の価値がある。郷土史などの歴史関係の本が多く、国語国文関係はそれほどでもないが、掘り出し物があるかもしれない。「ヴァンドリエス 言語学概論」(藤岡勝二譯、刀江書院、昭一三初版本、購入価五千円、古書価一万円(西秋書店、平四)、平四購入)は、珍しさに買い求めたものである。

【入江書店】(福岡市中央区)

次に、福岡市の中心部、天神地区周辺の古書店を紹介する。この地区には、現在三軒の古書店があるが、いずれの店も入り組んだ路地の一角にあるので、店舗そのものを探すのに時間がかかる。学生時代から頻りに訪ねている筆者でさえも、いまだに道を間違える時があるくらいである。

入江書店は西鉄福岡駅の西側三百メートルほどのところにある。福岡を代表する古書店の一つである。文科系古書全般を扱っている。国語国文関係の本も多いが、玉石混交の感がある。全書物は粒揃いである。値段は、研究書の類はそれほどでもないが、一般書・啓蒙書は安い方だと思う。筆者は学生時代から幾度となく訪れているが、ほとんど変わったという印象がないのは、わかりにくい場所がらで、本の回転が比較的回り遅いということもあるのかもしれない。

【痛快洞】(福岡市中央区)

入江書店の前の通りをさらに西へ二百メートルほど行ったらところにある。この地区の古書店では最も新しい店である。店の大きさの割に本の量は多く、通路まであふれている。懐かしい漫画雑誌、チラシ、映画・芸能関係の本に特徴があるが、国語国文を含めた人文科学の良書も意外に多く、値段も全体に良心的である。整理が不十分なので、どこから何が飛び出すかわからないびっくり箱のような面白さがある。時間をかけてじっくり探してみることをお勧めする。

【現代敬語研究】(大石初太郎、筑摩書房、昭五八初版本、購入価二千二百円、定価三千九百円、古書価八千九百円(西秋書店、平五)、平五購入) など。

【草文書林】(福岡市中央区)

痛快洞からさらに西へ行ったところ、地下鉄赤坂駅近くにある。長い歴史をもつ店である。店を開ける時間がかなり遅いので、夕方五時前後に寄ってみるのが一番良いと思う。古書は文科系全般に亘り、黒っぽい本が多い。国語国文関係の本は、特に充実しているとは言えないが、往年の研究書、啓蒙書の類には見るべきものがある。値段も、比較的安いと思う。

【田中書店】(福岡市中央区)

地下鉄唐人町駅を出てすぐ北側の角にある。他の店からは孤立しているが、福岡の古本屋巡りには欠かせない店である。店舗はそれほど広くないが、古書

が見事に整理されているので、狭いという感じを受けない。恐らく、九州では最もスマートな店の一つと言えよう。古書内容は、文科系全般に亘り、特に哲学・思想、歴史、政治・社会関係の本が充実している。また、外国文学の原書・翻訳書が豊富なのも他の店にない特徴である。国語国文学関係では、やはり近代文学が充実している。国語書の方は啓蒙書中心である。古書価格は、全体に良心的である。なお、新書・文庫本などは置いていない。

次に、六本松地区の古書店を紹介する。ここは、九州大学の教養部があるところであり、その周辺に古くから三、四軒の古書店があったが、現在は八軒ほどに増えている。地方としては、全国的に見ても屈指の古書の街と言えるだろう。交通手段は、地下鉄が来ていないので、博多駅・天神いずれの方面からもバスを利用することになる。

【葦書房】(福岡市中央区)

言わずと知れた九州の代表的古書店。かつて、昭和五十年代の初頭まで、九州大学教養部の裏に小さな店を出していたことを知っている者にとっては、まさに隔世の感がある。書画・古文書などを手広く扱ってきたのが、その驚くべき急成長ぶりの要因なのだろう(出版を兼ねていることも関係あるか)。文科系全般に亘って豊富に古書を揃えている。わが国語国文学関係の古書の充実度も高い。特に近代文学の研究書・評論・随筆の質と量は、明らかに九州一である。書物・古書に関する本も多い。

しかし、古書価格は、全般的にかなり高い。特に、近代文学は、時には神田以上の値をつけていることがある。書画・古文書などで高利益を上げているのだから、一般古書くらいもっと安くできないものかと思うのは、貧乏研究者のヒガミだろうか。

ただし、その蒐書能力はさすがで、筆者も九州方言関連の、市場になかなか出ない本をここ数年のうちに何冊か購入している。例えば、『九州方言辞典 上巻』(中南部篤)、『上畝勝、昭三八初版本、六千五百円』、『肥前彼杵方言集』(富永寛、昭九初版本、二千五百円)、『訂正増補 鹿兒島語と普通語』(町田佐熊、大一重版本、五千円) など。値段は、ご覧の通り、やはり安くはない。

なお、古書目録『九州の郷土誌文獻目録』を出している(年々分厚くなるのは店の成長を物語る)が、書画・古文書・郷土史に偏っているのも、他の国語国文関係を含めた一般古書の目録も出してもらいたいと思うのは筆者一人に限らないだろう。

【未来書房】(福岡市中央区)

葦書房と道路を隔てた向かい側にある。北九州市小倉に店を出していた時から、良書を集めていたのだが、こちらに来てからもやはり魅力のある店である。歴史、社会・思想関係の本が多いが、国語国文も近代文学を中心に少なくない。絶版・品切れの新書、文庫本にも良いものも多く、値段も手頃である。中国関係文獻中心の古書目録『上海茶館だより』を出している。『世界の児童文学』(波多野完治他監修、国土社、昭四二初版本、購入価一千三百円、古書価八千八百円(西秋書店、平一)、平一購入) など。

【雄朋堂】（福岡市中央区）

葦書房の通りを西新方向へ五十メートルほど行って左へ曲がったところにある。構えは大きくないが、きれいな店で、古書はよく整理されている。社会・思想関係の本が多い。国語国文関係の本はあまり多くないが、値段は良心的な方である。

【古書桂林】（福岡市中央区）

九大教養部正面から、大濠公園の方へ路地を入ったところにある。数年前開店の、新しい店である。一般書が多いが、白っぽい研究書も意外に置いてある。そして、値段がかなり安いのが特徴である。例えば、『院政期言語の研究』（山田巖、桜楓社、昭五七初版本、購入価三千五百円、定価六千八百円、古書価二千九百円）（八木書店、平四）、購入価一千五百円、定価二千五百円、古書価一千二百円）（八木書店、平四）など。

【天導書房】（福岡市中央区）

九大前の通りを天神方面へ向かって少し歩いたところにある。福岡市の古書店の中でも老舗の一つである。筆者は、学生時代からたびたび寄っているが、古書の内容にはあまり変化がない。古書は各分野の本が揃っている。国語国文関係の本も少なくないが、店に並べられている本に限れば、質的には筆者の学生時代の方が良かったように思う。値段は標準的と思われる。二種類（古典籍とその他）の「天導書房目録」を出しており、店売より目録通信販売の方に重点を置いているのかもしれない。なお、この店の支店が、博多駅の井筒屋の中にある。量は少ないが、黒っぽい本も並んでいて何か見つかるかもしれない。

【三和書房】（福岡市中央区）

教養部の正面の大通りにある。小さい店で、往年の古本屋という感じである。しかし、店内は筆者の学生時代よりかえって整理が良くなり、書架も増えてよく頑張っているという印象である。古書は、一般書・教科書が多いが、黒っぽい本もあり、値段も安いと思う。

【リブレール美古多】（福岡市中央区）

教養部のすぐ東側にある。小さな店であるが、仕入れに熱心なようで、回転も早そうだ。整理が十分でないが、各分野の硬い本も少なくなく、値段も相当地に安い。最近、筆者はここで数学の啓蒙書をたくさん手に入れたが、絶版・品切れの本がほとんどであるにもかかわらず、みな数百円という安さだった。

【賛化堂】（福岡市中央区）

教養部のすぐ西側にある。この付近の店の中では一番新しい店で、『全国古本屋地図』未掲載である。その名が示すように、佐賀市の坂田賛化堂書店の支店としてできたものである。場所がら、大学教科書の類が多いが、整理が不十分なので、何か掘り出し物があるかもしれない。和泉書院などの新本の割引本がかなり置いてあるのも特徴である。

【ふえろう書房】（福岡市城南区）

賛化堂の通りを南へ二キロメートルほど行ったところ、西鉄長尾五丁目バス停近くにある。他の店からは孤立しているが、一見の価値がある。店内はなかなか広く、本の量も多い。人文科学書を中心に、黒っぽい本が少なくない。国

語国文関係の本も、近代文学中心に古いところから新しいものまでいろいろ置いている。重厚な研究書は少ないが、探書の楽しみのある店である。新書・文庫本は随分と安い。

次に、西鉄大牟田線沿いの古書店を紹介する。それらの多くは、昭和五十年代前半の都市整備によって、市の西部、西新地区周辺から移転してきた店である。いずれも駅のすぐ近くにあるので、探訪には大変便利である。

【書肆幻邑堂】（福岡市中央区）

西鉄福岡駅を出て最初の停車駅である薬院駅から六本松の方向へ四百メートルほど歩いたところにある。古色蒼然としていかにも往年の古本屋という感じの店である。店内は整理が十分でないが、哲学・思想、文学、社会科学全般に亘り、黒っぽい珍しい本が多い。かつては左翼関係の本に特徴があり、筆者もプロレタリア文学関係の本を何度か購入したが、最近はどうでもなくなった。値段もかなり良心的な方だと思う。

【大橋文庫】（福岡市南区）

薬院駅の三つ先、大橋駅の周辺には三軒の店がある。大橋文庫は、駅を出て真すぐ歩き、大通りに突き当たってすぐ右にある。小さな構えの中に本が溢れている。一般書中心だが、近代文学を主として白っぽい国語国文関係の本もなかなか多い。書架には前後二列に本が並べられてあり、「奥の本を見ないで下さい」と貼り紙をしているが、素直に従って掘り出し物を逃すことになる。値段もかなり安いと思う。

【ブックセンター宝文堂】（福岡市南区）

駅前の並木通りを少し左に歩いたところにある。中は比較的広く、明るい店である。歴史・郷土図書を中心に黒っぽい本がかなり置いてある。国語国文関係の本は多くないが、時々珍しい本が見つかることがある。値段は標準的だと思ふ。最近目録通信販売（数店共同目録）はかたパピルスの会古書目録」に重点を置いていたようだ。

【方丈書林】（福岡市南区）

大橋文庫のある通りを南へ三百メートルほど行った四つ角にある。大牟田線沿線の古書店の中では最も新しい店の一つである。一般書・文庫・コミック本も多いが、短期間のうちに近代文学関係の本がかなり充実してきたように思う。外国文学関係の本が多いのも特徴である。

【古書遊眼舎】（福岡市南区）

大橋駅の次ぎ、井尻駅を降りて右折、井尻商店街の中にある。人文・社会科学を中心に黒っぽい本がなかなか多い。国語国文関係の本はそれほど多くはないが、整理が十分なので、何か掘り出し物が見つかるかもしれない。往年の創元選書がまとまって置いてあるのも目につく。値段はしっかりと付けてあり、安いという印象はない。

【清原書店】（福岡市博多区）

井尻駅の次ぎ、雑餉隈駅を降りて右折、商店街のアーケード近くにある。一般書中心。六本松から移転してきた当時は、近代文学の本に良いものが多かったが、最近はやや寂しくなった。筆者も当初かなり購入した覚えがあるので、

責任の一端があるかもしれない。古書情報誌や数店合同の古書目録でよくその名を見かけるので、販売の重点をそちらに移しているようだ。掘り出し物としては、『宮澤賢治・友への手紙』（保坂庸夫・小澤俊郎、筑摩書房、昭四三重版本、購入価三百円、古書価八千円（文泉堂書店、平三）、平三購入）あたり。『まこと書店』（福岡市博多区）

清原書店のすぐ近く、アーケードの中にある。一般書が多いが、郷土図書に力を入れているようだ。『討論日本プロレタリア文学運動史』（荒正人他、三一書房、昭三〇初版本、購入価五百円、古書価四千八百円（八木書店、平三）、平三購入）は、掘り出し物の部類。

以上で福岡市の古書店の紹介を終わるが、この古書店組合から「ふくおか古書店案内」という便利なパンフが出ているので、主要な店に聞いてみるとよい。

【松石書店】（久留米市）

久留米市には、かつて五、六軒の古本屋があったのだが、櫛の歯が欠けるように減り続け、最近も横山書店が廃業して、残ったのは、この松石書店と小山書店のみになってしまった。学生時代には、西鉄の電車で揺られてたびたび訪れ、掘り出し物も多かったのだが、そういう時代は二度と戻らないと思うと、感慨もひとしおである。

松石書店の特徴は、謡曲本を中心とした古典芸能関係にある。ただし、値段は新本扱いに近い。他は、郷土図書が充実している。国語国文関係の棚もあるが、特別言うほどのことはなさそうだが、時々品切れの研究書が原価で置いてあることがある。購入したもの例として、『朝鮮資料による日本語研究』（濱田敦、岩波書店、昭五八重版本、原価・購入価三千円、古書価九千八百円（八木書店、昭六三）、昭六三購入）、『源氏物語の研究』（武田宗俊、岩波書店、昭五八重版本、原価・購入価三千二百円、古書価九千八百円（八木書店、昭六三）、昭六三購入）などがある。また、新書、文庫も比較的安い。

【小山書店】（久留米市）

西鉄久留米駅からJR久留米駅の方へ延びる大通りの一角、久留米井筒屋のはす向かいにある。近年は新書・文庫・コミック本に押され気味であるが、珍しい黒っぽい本がなかなか多い。整理が行き届いていないので、国語国文関係の本が、あちこちに顔を出している。時間をかけて探すれば思わぬ掘り出し物に当たる可能性がある。値段もかなり安いように思う。珍しい買物として、『音曲玉淵集』（丸岡桂校訂、朝世流改訂本刊行會、大一初版本、購入価四千円、平五購入）がある。市場になかなか出ない本らしく、最近の古書価は不明であるが、昭五七年の八木書店の目録が一万二千元をつけていたものである。

【久留米古書センター】（久留米市）

伝統のある古書店が次々に姿を消す一方で、いわゆるセコハン本屋、ユーズドブック屋があちこちに出来ていることを知っている人も多いだろう。専門書という観点からすれば、これらの店に期待をかける方が土台無理なのだが、何

が飛び出すか分からない面白さもあるので、馬鹿にしない方がよいと思う。そういう本屋の筆頭として、この久留米古書センターを挙げる事ができる。西鉄久留米駅から、高速のインターチェンジの方へ四百メートルほど行ったところにある。数年前開店の新しい店である。広い店内には、文庫・コミック・学習参考書・児童書・一般書で溢れ、中・高校生があちこちで立ち読みしているの、落ち着いて本を探そうと思う人は、尻込みしかねないが、そこそこのどまるか否かが、安くて良い本に巡り会おうかどうかの別れ道になる。とにかくこういう本屋は、一時間くらいかけて、根気強く探すことが必要である。その結果、何もなくて眼だけが疲れてしまうこともある。ここでの掘り出し物は、専門関係では、『古方言書』の追跡研究』（松田正義、明治書院、昭五三初版本、購入価四千八百円、定価八千円、古書価一万二千元（西秋書店、昭五三）、平三購入）、趣味関係では、『宮澤賢治批判』（佐藤勝次、十字屋書店、昭二七初版本、購入価千円、古書価二万八千円（文泉堂書店、平四）、平四購入）などである。

なお、福岡市と久留米市の間的小都市にも、いくつかの古本屋がある。まず太宰府市に一軒、太宰府天満宮の参道沿いに『天神書房』がある。『全国古本屋地図』未掲載。小さな店であるが、戦前の黒っぽい本もあり、値段もかなり安い。『萬葉片々』（春日政治、丁字屋書店、昭二三初版本、購入価一千二百円、現著書集定価八千円台、平五購入）。

筑紫野市には、JR二日市駅前の国道三三線沿いに『筑紫書房』がある。最近堅い本が少なくなったが、新書・文庫本は豊富で値段も安い。『宮澤賢治研究』（草野心平編、丁字屋書店、昭二二重版本、購入価四千円、古書価初版本一万八千円（文泉堂書店、平三）、平三購入）、『宮澤賢治』（森庄巳池、杜陵書院、昭一九初版本、購入価五千円、古書価一万三千円（文泉堂書店、平三）、平三購入）など。

さらに南下して、小郡市の北部、西鉄大保駅前にあるのが、『漫画文庫堂』（旧称史学書房）。小さい店で、その名の通り大部分が文庫・コミック本であるが、歴史・戦記関係を中心に古い本も若干ある。『新明解古語辞典 補注版』（金田一春彦他編、三省堂、昭四八初版本、平売品、購入価一千二百円、古書価二万五千円（第二版、西秋書店、平五）、平五購入）は、かなりの掘り出し物だろう。

最後に、県南端の大牟田市の古本屋を紹介する。当地は工業地域なので、古書店とは縁が薄いのではないかと思われがちだが、意外に良い店があるので、是非訪ねてみてもらいたい。福岡方面からは、西鉄特急で来るのが、速くて運賃も安い。

【古雅書店】（大牟田市）

市の中心部、本町商店街のアーケードの中にある。小さな構えだが、歴史のある店である。郷土史、戦記物、美術書が主だが、国語国文関係の本も近代文学中心に少なくない。値段も良心的な方であり、新書・文庫本は品切れのものでもかなり安い。

【吉田書店】（大牟田市）

古雅書店から見ると北東方向、南関方面へ延びる県道二〇八号線から別れたところのやや先にある。それほど歴史のある店ではないが、中は黒っぽい本が多い。国語国文学に関しては、国語学・古典文学は古い本が、近代文学では新しい本が目立つ。他の店にはないような比較的珍しい本もあるようだ。ただし、値段は地方の古書店としてはかなりのもので、筆者も欲しいと思いが、いまだに手が出せない本が何冊ある。中で、意を決して購入したのが、「方言学講座」(全四巻、東條操監修、東京堂、昭三六初版本、平三購入)で、購入価一万五千円は、二万八千円(日本書房、平三)、二万五千円(西秋書店、平三)に比べればまだ安くはあるが、地方としては躊躇してもおかしくない値段である。他の、一般書・新書・文庫本は、品切れのものでも随分安い。

【三池書房】(大牟田市)

JR大牟田駅のやや南、三池港へ向かう道路の陸橋を渡った右側にある。かなり以前からある店だが、平四年夏に店舗を改装、拡張して、面目を一新した。国語国文学のほか、歴史・考古・民俗、軍記物、郷土図書などにも強く、書物に関する書物のコーナーも見逃せない。

この店の特徴は、とにかくまとめた本がびくびくするくらい安いことで、特に近代文学の評論・随筆の品切れ本が、数百円程度でたくさん置いてあるのである。「全国古本屋地図」(平六年改定新版)の紹介記事に、「何度顔をだしても手ぶらで出た記憶がない」とあるが、全くその通りで、平四年九月以来、現在(平五年十一月)まで、七回寄って、購入した本が一三九冊に及ぶ。それでも金額にすれば六万五千円程度である。私のような買い手が他にどれくらいいるかわからないが、薄利多売に徹する潔さに拍手を送りたい気持ちである。それにしても、どこからあんなに綺麗な本をたくさん仕入れて来るのだろうか。ここで掘り出し物は挙げればきりがなく、その一部を紹介しよう。

(中央の古書価は省略)

九百円、中野重治随筆抄(複製版、筑摩書房、昭四五初版本)
七百円、わが国わが国びと(中野重治、新潮社、昭五〇初版本)

「年々の手応え」(佐多稲子、講談社、昭五六初版本)

中野重治 自叙の文学(桶谷秀昭、文藝春秋、昭五六初版本)

「時と人と私のこと」(佐多稲子、講談社、昭五四初版本)

啄木を繞る人々(吉田孤羊、改造社、昭四初版本)

「アヴァンギャルド芸術」(花田清輝、未來社、昭二九初版本)

「大江健三郎の世界」(松原新一、講談社、昭四二初版本)

「島崎藤村読本」(山室静雄、学習研究社、昭三三初版本)

「伊藤整の世界」(亀井秀雄、講談社、昭四四重版本)

【佐賀県】

佐賀県の古本屋の中心地はもちろん佐賀市であるが、近年は全般的に活気がないようである。店の数も増減があまりなく、特色のある店も比較的少ない。しかし、主要な店が県庁の周辺にまとまっていて、二、三時間で見て回れるので、近くに來るとやはりつい寄ってしまう。

【坂田賛化堂書店本店】(佐賀市)

県庁前の通りを西に少し行ったところにある。一般書・文庫など、軟らかい本が多いが、郷土史関係を中心に文系の堅い本も比較的揃っている。国語国文学関係の本は、重厚な研究書は少ないが、古い本も混じっており、掘り出し物があるかもしれない。「国語国文学論」(浅野晃、高山書院、昭一六初版本、購入価六千円)、古書価九千八百円(文泉堂書店、平三)、平四購入)あたり。

【坂田賛化堂書店白山店】(佐賀市)

県庁前から佐賀駅への通りを二百メートルほど行った右側にある。本店から分かれた当初は、堅い本もかなり多かったが、最近是一般書に押され気味である。本店同様、郷土図書が充実している他は、近代文学の創作、文学全集の端本、児童書が多く、値段も安い。

【敬文館増田書苑】(佐賀市)

県庁前の通りを東にちょっと行ったところにある。小さいが、見るからに歴史を感じさせる店である。中が暗いので、店を開けているかどうかは、入り口の戸に手をかけてみないと分からぬ。中は、天井から裸電球が下がっており、客が自ら点灯して探すしくみ(?)になっている。何とも言えない風情がある。奥の番台のようなところに、かなりお年を召した女主人が、超然とした様子で座っている。本は、文字通り黒っぽいものが大部分で、他の店ではなかなかお目にかかれないものが多い。しかし、値段はよく調べてあり(亡くなったご主人の遺産であろう)、新書・文庫本以外は、特別安いという印象はない。掘り出し物というわけではないが、「新文典別記 上級用」(橋本進吉、富山房、昭一〇初版本、購入価三千円)など、珍しさに買い求めたものである。最近、店を開めていることが多く、今後が心配である。

【西村温故堂】(佐賀市)

敬文館を出てさらに東へ歩き、右に折れて国道二〇八号線に入ってしばらくのところにある。一般書が中心だが、社会・自然系の専門書がなかなか多い。国語国文学関係には目立った特徴がないが、全体的に安価なので、寄ってみる価値はあると思う。

【木下書店】(唐津市)

唐津市には二軒の古本屋があるが、いずれも掘り出し物が期待できる店である。福岡方面からは、JR筑肥線を利用するのがよい。海岸線の景色を楽しみながら来て、良書を得て帰ることができれば万々歳ということになる。

木下書店は、唐津市役所の近く、国道二〇四号線から唐津駅へ行く通りを西に少し入ったところにある。郷土資料の他は、重厚な研究書の類は少ないが、値段はみなかなり安い。絶版・品切れの文庫本にも良いものがある。まとめ買いをすると値引きもしてくれる。新潮文庫・角川文庫の近代俳人の句集(ほとんどもが絶版・品切れ)二十冊近くをまとめて、千円程度で手に入れた(平五)

【古時計】(唐津市)

唐津駅前のアーケードを東へ百メートルほど歩いた左角にある。狭い店内の

半分以上は、文庫・コミック・アダルトグラフィックが占めているが、その店の名前に相応しい、時を越えて来た珍しい本がかなり置いてあるようだ。国語・国文関係では、三島由紀夫の『金閣寺』（昭三・一初版本、新潮社、カバー有り、帯無し）を二千三百円で入手した（平五）が、ブームはとくに去ったとはいえず、中央の値段はまだかなり高いので、掘り出し物の部類と言えるだろう。また、高木貞治『新撰算術』（明四二重版本、博文館）は、わが国最初の世界的数学者の処女作（二十三歳の時の著述！）として有名らしいが、二千五百円で購入した（平五、古書価格は不明）。趣味本として、数学の啓蒙書や歴史的名著を集めたのは、今年（平五）の夏からで、同じ著者の『近世数学史談』（昭一七初版本、河出書房、購入価四百円、古書価不明）を熊本市の古本屋で入手したのに続く掘り出し物である。古書は、それを本当に欲しがっている人を引き寄せるというが、まさにそれを実感する経験であった。なお、佐賀県にはもう一軒、鳥栖市に「かっぱ書房」がある。一般書中心だが、『全国古本屋地図』に未掲載なので、訪ねる人も少ないと思われる。何か期待できるかも知れない。

〈長崎県〉

長崎県の古本屋は、長いあいだ長崎市の老舗二軒以外には、ほとんど見るべき店がなかったが、近年、長崎市と大村市に相次いで新しい店ができて、にわかに活気づいてきた。ただし、わが国語国文学関係の古書の充実度は、いま一步というところで、今後の発展に期待したいところである。「長崎古書店地図」がパンフで出ていて便利であるので、最寄りの店に聞いてみるとよいだろう。

【文禄堂書店】（長崎市）

長崎いちばんの繁華街、浜町アーケード内にある老舗。隣がやはり長崎一の新刊本書店好文堂であるためか、そちらのついでに寄るといふ人も多いようである。いつ行っても数人から十数人の客がいる。本の量は県下随一で、国語国文関係の書も比較的充実している。ただ、中高生用の学習参考書の類が専門書と区別なく並べてあるので、鬱陶しく感じられることもある。また通路が狭くて、探書の最中、人が後ろを通る時には、必ず身をよけなければならず、気が散るのも欠点といえば欠点である。

古書価格は、全体的には地方としては安くはないという印象をもつが、本によってかなりのばらつきがあるようである。高いと感じたものでは、かつて中野重治関係のものを集め始めたころ、絶版の『中野重治研究』（旧版全集別巻）と品切れ中の亀井秀雄『中野重治論』が並んで置いてあり、それぞれ一万二千円、八千円の値がついていた。これは神田の古書価格に劣らないもので、店に寄るたびに本を裏返して価格を確かめ、溜め息をついていた。その後、それぞれ千五百円（熊本、鶴屋デパート古書市、平二）、千円（大阪、関西ブックスセンター、平三）で入手して、本を裏返すことはなくなったが、さすがに数年間は売れなかったようである。安く手に入れた本としては、『作品論の試み』（三好行雄、至文堂、昭四七重版本、購入価二千二百円、原価三千円、平五購入

）をまず挙げる。これは、最近著作集の形で再刊され、五千円台で手に入れることができるようになったが、それまで、元本の方は、神田では、安い八木書店でも一万五千円、西秋書店や文泉堂書店では二万五千円をつけていた（平四現在）ものである。ついでに、『芥川龍之介論』（同、筑摩書房、昭五一初版本）も二千二百円（原価一千六百円）で入手した。これら他にも五千円台の著書が二冊並んでいたものであるが、みな数カ月前に寄った時にはなかった本ばかりで、最近入ったものを運良く手に入れることができたものと思われる。こういうことがあるから、古本屋巡りはやめられないのである。その他、現在の神田価格では万単位の値段がついている掘り出し物として、『未明感想小品集』（小川未明、創生堂、大・四初版本、購入価千八百円、平四購入）がある。これはめったに出ない本のようで、『日本古書通信』（平五・五月号）掲載の中野書店（神田）の値段は、三万九千円となっている。一方、専門の国語学の掘り出し物は、『学校文法文章論』（永野賢、朝倉書店、昭三四初版本、購入価一千八百円、古書価一万二千円（八木書店、平四）、平四購入）くらいであるが、ともかく、何かあるのではないかと期待できる店であるので、来長の際は、必ず訪ねるべきである。

【大正堂書店】（長崎市）

文禄堂と並ぶ老舗。繁華街から少し外れたところにあるので、ここを訪ねる客は本堂の本好きであろう。店内は整理が行き届いており、通路も比較的広いので、落ち着いて本を探そうことができる。古書の値段はよく調べられていて、掘り出し物は少なそうである。ただ、昨年（平四）の春に立ち寄った時、若い女性が岩波の日本古典文学大系（旧）全冊揃いを十万円ちよとで買ったところに出会った。立ち聞きしていると、長崎大学の教育学部を出て、まもなく五島の中学校に新卒として赴任するところだ、古典文学が何よりも好きだから云々、という話だった。全集物が案外安いのもかもしれない。その他の国語国文関係の本もなかなか充実しているが、中でも時代的には近代、分野としては詩・短歌・俳句が得意のようだ。また、『解釈と鑑賞』などの雑誌も平積みで充実している。筆者も、長崎の方言関係の本を幾度か購入している。ただ、場所がからから、本の回転はそれほど早くなさそうである。

【銀河書房】（長崎市）

文禄堂の近く、浜町アーケードから東に路地を少し入ったところの、洋服屋の二階にある。近年オープンした新しい店である。小さな構えで、文庫本・コミックも同居している。量的には多くないが、国語国文関係の本は、なかなか充実している。やはり、近代文学が多い。昭和の文学者の創作や随筆のコーナーに見るべきものがある。ただし、値段はかなりのものである。むしろ、絶版・品切れの新書本や文庫本に珍しいものが多く、値段も手頃なので、掘り出し物が期待できるかもしれない。

【ふるほん太郎舎】（長崎市）

長崎大学の文教町キャンパスの正門前にある店。長崎市の中心部からは電車

家の単行本がよく揃っているのは、河島書店同様である。また、書物に関する書物のコーナーがあって、筆者も何冊か購入している。古書価格は、地方史などの郷土図書は別として、全般的に良心的な方だと思う。「近代文章研究」(林巨樹、明治書院、昭五一初版本、購入価一千九百円、定価三千二百円、古書価一万二千円)(八木書店、昭六三)、昭六三購入)あたり。古書目録「天野屋目録」が出ている。

【緑書房】(熊本市)

河島書店のすぐ近くにある。小規模な店で、タバコや切手も一緒に売っているところが面白い。また古書即売会以外の普通の店頭販売で、消費税を取るのとはここら面白いものである。本の量も多くな、店内は雑然としているが、全書物に見るべきものがあり、また社会・思想関係の古い本が奥の方にかなり置いてあるので、そちらに興味のある人は、掘り出し物が期待できるかもしれない。

【松永書店】(熊本市)

市街電車の水前寺公園前のすぐそばにある。小さな構えだが歴史のある店である。国語国文関係では、近代文学になかなか良い本がある。値段も安く、本の回転も意外と早いので、目の離せない古本屋である。「文学探求の言語学」(林四郎、明治書院、昭五〇初版本、購入価三千五百円、定価六千円、古書価一万二千円)(西秋書店、平三三、平三購入)など。

【デラシネ書房】(熊本市)

熊本大学黒髪キャンパスから国道五七号線を西に二百メートルほど行ったところにある。かつて熊本大学付近には三、四軒の古本屋があったのだが、現在はこの店だけが残っている。学生の書物離れが著しい今日、安定的経営は困難だと思うが、是非存続して行ってもらいたくないものである。値段も比較的安いほうである。社会・思想関係や教育関係に特徴がある。国語国文関係ではやはり近代文学が多いが、語学関係の本もかなり置いている。主人は誠実な人柄で、シャイな筆者が気楽に言葉を交わす数少ない店主である。なお、つい最近、河島書店などがある上通りアーケードを途中から東に入って、国道三三線に突き当たるすぐ手前にある新刊本の三章文庫という店の中に支店ができた。

【魁孔舎】(熊本市)

JR豊肥線(阿蘇高原線)の南熊本駅近くにある。数年前開店の新しい店である。比較的広い店内の半分は、文庫・コミック本で占められているので、うっかりするところありきたりのセコハン本屋として見逃してしまいが、外見と中身は大違ひである。単行本でも、「国語法論攷 追補版」(松尾捨次郎、白帝社、復刻版昭四四初版本、購入価四千円、定価七千円、古書価二万五千円)(日本書房、平三三、平三購入)のような掘り出し物があるが、特に、この主人は、絶版・品切れの新書(型)の本の掘り出し名人で、筆者は、中央の古本屋でもなかなかお目にかかれない本をたくさん手に入れることができた。以下に、いくつか紹介しよう。

百五十円

【外来語の履歴書】(矢崎源九郎、角川新書、昭三六初版本)
【国語問題のために】(時枝誠記他、東大新書、昭三七初版本)
【生きてゐる方言】(柴田武、筑摩グリーベルトシリーズ、昭四〇初版本) 百円

【現代の日本語】(釘本久春、古今書院、昭二七初版本)

【これからの国語】(藤原与一、角川新書、昭二八初版本)

【言語と文体】(魚返善雄、紀伊國屋新書、昭三八初版本)

【ことばの社会学】(柴田武、NHKブックス、昭四〇初版本)

【現代語のふるさと】(白石大二、秀英出版、昭四一初版本)

【国府堂書店】(熊本県阿蘇郡西原村)

筆者がこれまでに寄ったことのある古書店の中で、最もユニークな店である。まず、所在地がおよそ古書店のある場所のイメージから懸け離れたところにある。市街地から、熊本空港を経て阿蘇の方へ、狭い地方道をぬくねと登って行った、山街の中にあるのである。車で三〇分はかかる距離である。もととは、その店名が示すように、市街の水前寺公園近く、国府というところ到店を出していったのだが、書庫が手狭になったことと、都会の喧噪を嫌って移って来たということである。次に、その店の造りである。ログハウス風の丸太組み二階建ての外観は、書店の看板が無ければ、ちよっとした別荘かペンションに間違われることうけあいである。そして、店の応対。温厚な中年の店主と、控えめな物腰の奥様が、寄るたびにお茶で歓待してくれるのである。

古書は二階の一室に整然と並べられている。国語国文から美術書まで、様々の分野の本がある。黒っぽい本が多いのが特徴で、まだ書庫に眠っている本も多いとのこと。絶版・品切れの文庫本にも良いものがある。現在は目録販売(「国府堂書店古書目録」)に力を入れているとのことだが、車で来熊の折りに是非一度寄って欲しい店である。

ついでに記すと、この店についての紹介記事が「本の雑誌」平四年六月号に「阿蘇山麓で古本屋を発見!」という題で載っている。手前味噌になるが、そこに出てくる熊本大学の先生と学生というのは、筆者と筆者の教え子のことである。

その他、デラシネ書房から子飼橋を渡り、県立劇場への途中に「グエル書房」がある。一般書中心。古い漫画雑誌・コミックに特徴がある。最近のオーブンとして、「満遊書店」が、藤崎宮の近くへ、県庁の近く国道三三線東バイパス沿いに二軒ある。古本センターと言うべきで、黒っぽい本から、一般書・新書・文庫・コミック本まで多量に置いている。とにかく安い。

なお、熊本市周辺以外には、玉名市の玉名高校前に「ほると書房」がある。もともと長崎県島原市で別の生業にしていたが、雲仙災害に遭って移り住み、昨年(平四)開業したとのこと、地元テレビでも紹介された。文庫・コミック本・一般書中心だが、堅い本も若干置いている。

【大分県】

大分県の古本屋の所在地は、大分市と別府市だけと言ってよく、主要な店の

数もそれぞれ三軒ずつなので、一日あればじっくり探書ができる。営業時間については、別府市の古本屋の方が遅くまで店を開けているので、大分県を先に回った方がよいだろう。列車で移動すれば二十分とかからないので便利である。大分県は、一口で言えば、大分市に昔の面影はなく、別府市の方が面白いところになるかと思う。大分市の場合、老舗のハレルヤ書店が二年ほど前、主人の他界に伴って廃業してしまったことが、何と云っても惜しまれてならない出来事である。古書目録「芸編雅載」を年に数回出し、注文しなくても律義に送ってくれたのだが、今では、その十数冊と、例えは「大分県方言類集」(土肥健之助編、国書刊行会、三千円)、「大分県方言集」(渡辺之夫他、川口印刷、三千円) (いずれも平二購入) などの掘り出し物が、形見となってしまった。蔵書一代という言葉があるが、これからは古書店もよほどの孝行息子がいなければ、一代で終わってしまうのかもしれない。

【藤井書店】(大分市)

JR大分駅前のアーケードを少し左に入ったところにある。ハレルヤ書店なきあと、大分県は古書業界の伝統を守る貴重な存在となったが、気品のある主人も高齢と思われる、将来が気遣われる状況である。

扱う古書は、人文・社会・自然全般に亘り、特に、郷土図書、宗教関係などが充実している。国語国文図書も豊富であるが、かつてほど珍しい、黒っぽい本は少ないように思う。ただし、値段は良心的なものが多く、掘り出し物としては、「講座 正しい日本語」(全六冊揃、明治書院、昭四五、四六初版本、購入価三千五百円、古書価二万五千円(八木書店、昭六三)、昭六三購入)、
「反自然主義文学」(高田瑞穂、明治書院、昭四二重版本、購入価九百八十円、古書価一万二千元(八木書店、平五)、平五購入)、などである。

【河野書房】(大分市)

大分駅から歩いて十分くらい、県庁の東側にある。重厚な研究書の類が中心の隆文洞と一般書中心の本店とが、狭い路地をはさんで目と鼻の先にそれぞれ店を出しているが、最近隆文洞の方は閉めたままのようだ。二三年前に寄った時には、隆文洞の方で良い買い物ができたのだが、本店の方は、郷土図書以外、これと言った特徴がなく、古本屋巡りをする人間にとって面白味がなく、売ってきたのは残念である。「河野書房古書目録」を出しており、硬い本は通信販売の方で主に売っているようだ。値段の方は、これまでの購入経験では、かなり安いように思う。

【森書房】(大分市)

河野書房のすぐ近くにある。小さな店であるが、中の本は意外にボリュームがある。一般書も多いが、国語国文関係を含めた文科系の本も少なくなく、値段も手頃である。新書・文庫本も豊富で安い。「現代の敬語」(辻村敏樹、共文社、昭四二初版本、購入価一千元、古書価六千五百円(西秋書店、平一)、平一購入)など。

【麻生書店】(別府市)

JR別府駅前の通りを東へ折れて、数分のところにある。現在、大分県では

最も面白い存在の店と思われる。かなり広い店内には、郷土関係図書を中心に、さまざまな分野の本がある。国語国文関係の本は、レジ近くにまとまって置いているが、あちこちの棚にもひょっこり顔を出している。時間をかけてじっくり探書することをお薦めする。国語学関係の基本図書もあるので、学生、院生の人は是非一度寄って見られたい。値段は特別安いという感じではないが、比較的高価な新本については、かなり値引きすることがある。「古典語現代語助詞動詞詳説」(松村明編、學燈社、昭五一)が、定価八千円のところを五千五百円(平三購入)というのがこの例である。

【大野書店】(別府市)

麻生書店からさらに東へ歩き、大通りへ出たところの向かい側にある。一般書が多いが、近代文学を中心とした国語国文関係の本も少なからず置いている。雑然としたが、良書が埋もれているかもしれない。値段も手頃である。

【広雅堂書店】(別府市)

別府大学の近くにある。前記の二つの店からはかなり離れているが、別府駅からJRに乗って、別府大学前駅で降りればすぐの距離である。大分県では老舗の一つである。場所がらか、考古学、歴史関係の本が多い。国語国文関係の本は多くなく、値段もしっかりと付けているので、掘り出し物は期待薄であるが、この店には有り難い思いもある。十年ほど前に寄った時、国語学の基本図書である山田孝雄博士の「奈良朝文法史」と「平安朝文法史」の真新しい本が並んで置いてあり、ともに定価四千八百円(昭五四重版時)のところを四千五百円と付けていた。多分、当時既に品切れになっていた、店としてはそれほど高値とは思ってはいなかったのだろうが、二十代後半の薄給取りには容易に手が出ず、涙をのんでその場を去ったのだった。ところが、その後いつ寄っても二冊はその場に仲良く並んでおり、値段も四千五百円のままであった。そして昨年(平四)になって、既に八千円で再刊されていることを知って決心が付き、二冊とも買い求めたのである。もちろん四千五百円のままである。本の回転が遅いのも悪いことばかりではないという例である。この二冊の本は、よくぞ十年間待っていてくれたと、頻りに謝りあげた。所は変わったが、二冊は今も仲良く並んで書架に収まっている。

以上、大分市と別府市の古書店を見てきたが、大分県にはもう一軒、竹田市に「竹屋書店」がある。一般書中心だが、郷土史関係のほか、黒っぽい本も多い。絶版・品切れの文庫本は随分と安いようだ。熊本からは、大分・別府の古本屋巡りのついでに寄ることが容易であるが、福岡方面からは遠回りになるので、観光で当地近くにきた際に覗いて見られたい。なお、「全国古本屋地図」には、県北部の中津市にも、二軒存在すると紹介してあるが、どうやら二軒とも廃業したようである。

【宮崎県】

宮崎は、鹿児島と並んで、古本屋の最も少ない県の一つである。筆者は、熊本に来る前の八年間を宮崎市に暮らしたが、古本屋らしい古本屋は一軒しかなく、古本屋巡りの楽しみがなくて詰まらなかつた。熊本に来て、憑かれたよう

に古本屋巡りをし始めたのは、その反動もあったのである。

【橋本書店】（宮崎市）

市の中心部、山形屋デパートなどがある橋通りの交差点から国道一〇号線を三百メートルほど北へ行ったところにある。戦前からの老舗で、宮崎県では長い間、孤軍奮闘の形で頑張っている。先年まで、宮崎大学のキャンパスが近くにあって、立地条件は悪くなかった筈であるが、いつ寄っても、客はゼロか一人で、専門書を探す学生にはほとんど会わなかった。古書店の数と内容によって、その土地の文化程度が分かるとよく言われるが、当県では、客の方の質が低すぎるように思う。それでも、この店は客に媚びようとはしないよう、ここ十年間くらいで、他の店のようにセコハン本やコミック本が棚に溢れるという現象が全くないのはさすがである。

店内は、かなり広く、本の量もなかなか多い。内容も、人文・社会・自然の全般に亘るが、郷土図書、教育・心理関係、社会・思想関係の本が目立つ。国語国文関係の本も、重厚な研究書から、創作・エッセーに至るまでバラエティーに富んでいる。値段は、研究書の類は特に安いという印象ではないが、例外的に、次のようなものがある。「国語表現論」（江湖山恒明、牧書店、昭三〇初版、購入価二千元、古書価二万九千元（八木書店、平四）、平四購入）、「文章研究序説」（時枝誠記、山田書院、昭三五初版、購入価一千三百円、古書価一万五千元（八木書店、平四）、平四購入）、「国語文体論序説」（桑門俊成、誠信書房、昭三四初版、購入価一千二百円、古書価六千元（西秋書店、平四）、平四購入）など。他の、やや軟らかい本は、かなり安価である。

なお、「全国古本屋地図」には、宮崎県の他の古本屋として、宮崎市、延岡市、都城市などの店を紹介しているが、国語国文関係の硬い本を探そうという方にはお薦めできない。

（鹿児島県）

鹿児島県の古本屋も、宮崎県同様、まともなものは一軒しかない。昭和五十年代前半までは、鹿児島市の中心、天文館近くに、三、四軒あったのだが、客観的に見て、宮崎県よりはるかに文化程度は高いと考えられるので、不思議な気がする。特に、総合大学の名に恥じない鹿児島大学の周辺にまったく存在しないのは、どうしてなのだろうか。実学重視の県民性ということがあるのだろうか。ともかく、宮崎県と並んで、古本屋遠征の楽しみが少ないのは淋しい限りである。

【糸書房】（鹿児島市）

鹿児島県の古本屋の最後の孤塁を守る店。天文館の裏通りにある。全体的に、宮崎の橋本書店に似ており、人文・社会・自然全般の本が置いてある。特色は、やはり郷土図書と教育関係の本のようだ。国語国文関係の本も少なくないので、探書の楽しみはあるが、値段はもう少しというところである。筆者が時々購入するのは、鹿児島県と南方の方言関係文献である。「糸書店古書目録」を出している。

以上、九州の主要な古書店を紹介してみたが、最近の古本屋の変動は激しく、筆者の情報もすぐ古くなる可能性が大いにある。行ってみたら既に廃業していたとか、期待していた国語国文関係の本がほとんどなかったということがあ

（平五年十一月稿）

— 熊本大学文学部助教授 —